

バンクーバー・The University of British Columbia での2年間

The University of British Columbia
Faculty of Pharmaceutical Sciences

濱野 展人
(ブリティッシュコロンビア大学薬学部)

2016年2月から2年間、バンクーバーにあります The University of British Columbia (UBC) , Faculty of Pharmaceutical Sciences, Dr. Shyh-Dar Li lab. にて博士研究員として在籍しておりました。UBC は、2010年に冬季五輪が開催され観光地としても有名なバンクーバーに位置する州立大学であります。キャンパスはダウンタウンから少し外れたところにあります。バスなどのアクセスも良く、キャンパス内にあるバラ園からは海や雪に覆われた山々が見えるなど、自然豊かな環境にありました。

ボスである Shyh-Dar Li 准教授は、2014年にトロントにありますオンタリオ癌研究所から UBC へ移動されたばかりの PI で、ドラッグデリバリーシステム (DDS) に関する研究を行っており、これまでにマイクロ流体デバイスを利用したがん微小環境まで送達可能なナノ粒子の開発などに成功しています。研究室のメンバー構成 (2016年当時) は、筆者を含めポスドクが3人、博士課程の学生が2人、修士課程の学生が3人を中心とし、他には夏休みなど短期で UBC 薬学部や理学部の学生、またメキシコやシンガポール等から学生が加わるなど、少人数ではありながら活発な研究室でありました。また国際色も豊かで、ボスが台湾人であるのを筆頭に、イギリス、インド、イラン、サウジアラビア、中国など多国籍で、加えて移民の受け入れが多いカナダらしく、中国系やインドの2世・3世が多いことも印象的でした。この環境は、私自身の英会話能力の向上の手助けとなったと思います。ディスカッションの際はもちろん、他愛のない会話でコミュニケーションをとる時など、あまり発音が良なくても、何を言っているのか聞こうとしてくれる姿勢には大変助かりました。また同時に、彼らの気持ちに応えるためにもよりきちんとした英語を話そうと、更なる努力へと繋がりました。

研究面においては動物実験の厳しさが印象的でした。ボスが提出する動物実験計画書の審査はもちろん、実際に動物を扱うすべて手技別 (取り扱いから麻酔、動物への投与、外科的処置等) に、web によるテストと実地講習・実技テストの2種類がありどちらも突破しなければ実験できないということには驚き、特に実地講習・実技テストでは大変緊張していたのが良い思い出です (受けてみると動物実験の経験があれば何という事のないものなのです

が。)。他にも、ボスが若いPIということもあり、たいてい週に1度はボスと直接ディスカッションをすることができたということも大変良い経験となりました。この経験でボスがどのように考えて形に（論文に）しようとしているのか、グラントをとる戦略はどのようなのかなど、ボスの考え方に直接触れることができたことは、何にも変えることができない貴重なものとなりました。

末筆ではございますが、このような貴重な経験をご支援いただきました上原記念生命科学財団の皆様にご心より感謝申し上げます。

(2018. 4. 27受領)